

平成 16 年度高次脳機能障害支援モデル事業 年次報告
(千葉県)

1. 国リハ登録事業

登録作業にはいるのが遅くなったこと、支援コーディネーターの2名うち1名が今年度に入って新規担当者に替わるなど、当該事業にかかわるスタッフが一部変更されたこと等、手続きがうまく流れず滞ってしまった。

	新規登録者 (予定)	継続登録者	計
愛育園	1 (2)		1 (2)
リハ医療施設	(3)		
更生園	(1)	2	2 (1)
外 来		13	13 (3)
小児		3	
成人		10	
合 計	1 (6)	15	16 (6)

2. 平成16年度支援センター事業

これまで3か年のモデル事業で動き始めた各部署での活動を、モデル事業として位置づけ直し、みんなで行き届く体制をとるために、ワーキンググループとして整理した。

(1) 小児関係グループ

【目的】 1) 当センターにおける小児の高次脳機能障害に対する評価・診断・訓練・支援についての継続的なシステムの構築、2) 国リハ登録事業を円滑にすすめること、を目的に活動を行っている。

【実施状況】 平成16年度は計5回の会議と計3回の支援活動を行ってきた。

会議について：国リハ登録事業について、新規登録の該当者が出た場合の登録までの流れについて再検討および小児事例児の復学先への支援の在り方について検討を行い、これまでの文書による報告書と平行して行ってきた、事例児が退園後通う学校への訪問説明による支援の必要性を再確認と実施方法の再検討。

訪問実績：	訪問先の学校	方法	内容	訪問した職種
事例1	受傷後転校した養護学校	講演	障害理解	理学療法士・言語聴覚士
事例2	受傷前通学していた高等学校	講演	障害理解	心理士・児童指導員
事例3	受傷前通学していた小学校	面談	障害理解 学習支援	作業療法士・言語聴覚士

(2) 広報啓発グループ

【目的】 1) 高次脳機能障害に関する情報を、県内の関連職種や当事者等必要とするところに、解りやすく提供する 2) 支援センター発行の「新・モデル事業便り」や当センター高次脳機能外来・評価診断のシステムを掲載し、支援センターとしての機能を知らせていく。

【実施状況】

1) 新・モデル事業便りについて

これまでのモデル事業で作成してきた広報誌を、より多くの領域と地域に配布し、当センターの取り組みをお知らせすることとした。

配布先：当事業団各部署、県障害福祉課・各市町村福祉窓口、中核地域支援センター、主な医療機関、家族会、国リハ・モデル事業支援拠点機関、

2) ホームページ掲載内容の継続的更新

- ① 高次脳機能外来・評価診断のシステム掲載
- ② 平成16年度高次脳機能障害者支援モデル事業について掲載
- ③ 「新・モデル事業便り」(各月発行)の掲載

3) センター公開講座での、当事者・家族会の相談コーナー開設

4) 高次脳機能障害交流会実施

第3回高次脳機能障害交流会を以下の通り実施した。

日時： 平成17年3月5日(土) 11:00～16:00

会場： 千葉リハ大ホール、講堂

プログラム：講演 テーマ「働くってどんなこと？」

講師 藤尾健二氏 障害者就業支援キャリアセンター
佐々木よしえ氏 千葉障害者職業センター

講演の前に、①高次脳機能障害について②就労③生活支援④年金・障害者手帳診断書⑤損害保険⑥成年後見制度について、軽食を摂りながら各グループに分かれてフリートーキングの時間を設定した。

〈フリートーキングに入ってくださいお客様〉

藤尾健二氏(障害者就業支援キャリアセンター)、高橋真三樹氏(千葉県精神保健福祉センター当センター高次脳外来カンファレンス精神科医師としてスーパーバイザーとしても参加)
澤田 明氏他3名(損保ジャパン) 小川裕二氏(権利擁護センター「ばあとなあ千葉」)

*その他当センター職員(医師・作業療法士・看護師・心理発達治療士・言語聴覚士
保育士・ソーシャルワーカー・生活支援員等)

喫茶コーナー開設(飲料の有料販売)

「ふう」(若者グループ主催)

協力：ちば高次脳機能障害者と家族の会

総勢 150名(当事者・家族123名、スタッフ18名、講師他8名、ボランティア1名)

(3) 若ものグループ

【目的】当センター過去3年間に登録又は高次脳機能障害ということでご利用いただいた方々のうち、未就労の比較的若年層に絞って、同じ障害を持つ同年齢社との交流を通じて、福祉的な意味のものも含めて「働く」ことに関する取り組みを実施することを目的とする。

【実施状況】

月2回実施 第1・3水曜日 15:30～16:30(実施回数計20回、参加の部人数186+α人)

内容：年度当初は、みんなで集まって、ゲームや話し合いをするなど、集団の中での自分の位置づけと回りへの配慮の仕方を学ぶ場とした。しかし、議論しにくく、まとまりが持てないこともあり、みんなが一致した方向で活動する場を設定する必要が出てきた。

8月の集まりの際、12月5日に開催する当センター公開講座の場で、喫茶コーナーの運営の提案。それほど乗り気ではなかったが、メニューの検討などを始め、ポスターづくり、食券づくり、役割分担などのかなり長期のスケジュールの中で作業を進めることを始めた

この作業と通じて、本人が「打ち合わせの内容が全く解らない」「自分はまだまだ働ける力はない」といった気づきができはじめた。また、サポートする職員も、ルーチンの更生施設や家庭生活では見えなかった問題が発見でき、改めて高次脳機能障害の影響する範囲の広さや深さを実感した。その後3月5日に開催された、家族交流会でも喫茶コーナーを開設。

(4) 記憶障害グループ

【目的】 高次脳機能障害の認知障害による社会的不適応を、神経心理学的手法を用いて訓練し、その後の効果判定に基づきながら、社会適応への支援プログラムを作成に活かす。

【実施状況】

当センターがモデル事業に参画した平成13年度においては、高次脳機能障害者への系統的な評価バッテリーも支援プログラムのノウハウも全く持ち合わせていない状態であった。記憶に関するプログラムは比較的開発されており、当時から少しずつ実施し始めていた。

現在当該障害が主となる利用者も増え、当センターのどの施設においても訓練が必要になってきている。今年度においては、リハ医療施設および更生施設でのプログラムを中心に実施した。月3回実施 毎月曜日15:30～16:30(グループとして開始したのは11月から)である。14名の方を対象に3月までに計5回実施し、これまでに3名の終了者を出している。

(5) 高次脳外来カンファレンス

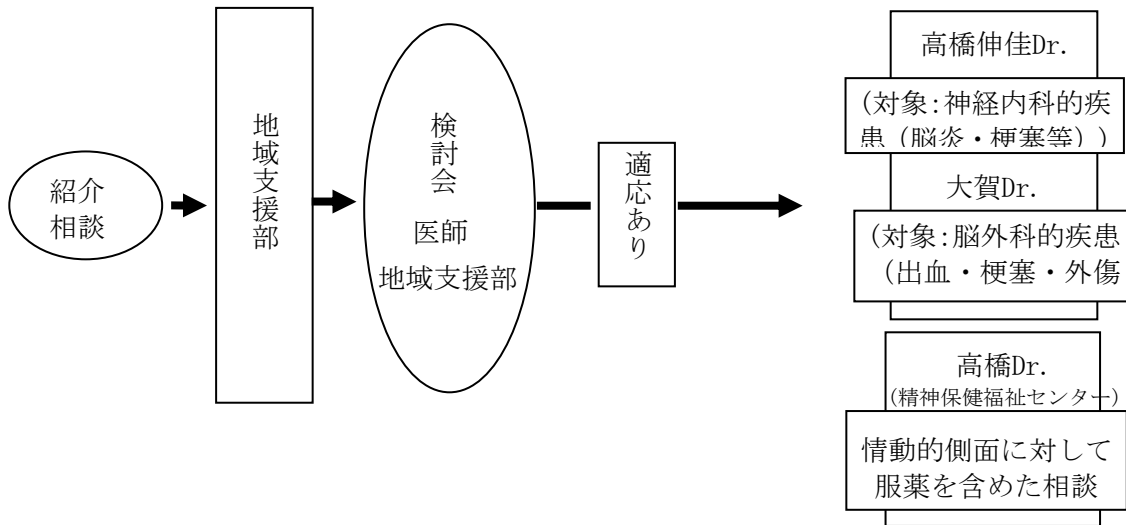
【目的】 1) 高次脳機能障害者に対する外来での神経心理学的評価・認知リハ訓練の適応決定および実行・神経心理学的検査によるリハビリ効果の評価、 2) 平成13年度以降3年間の高次脳機能障害モデル事業の成果を踏まえた外来での認知リハビリ訓練プログラムの確立を目的とする。

【実施状況】

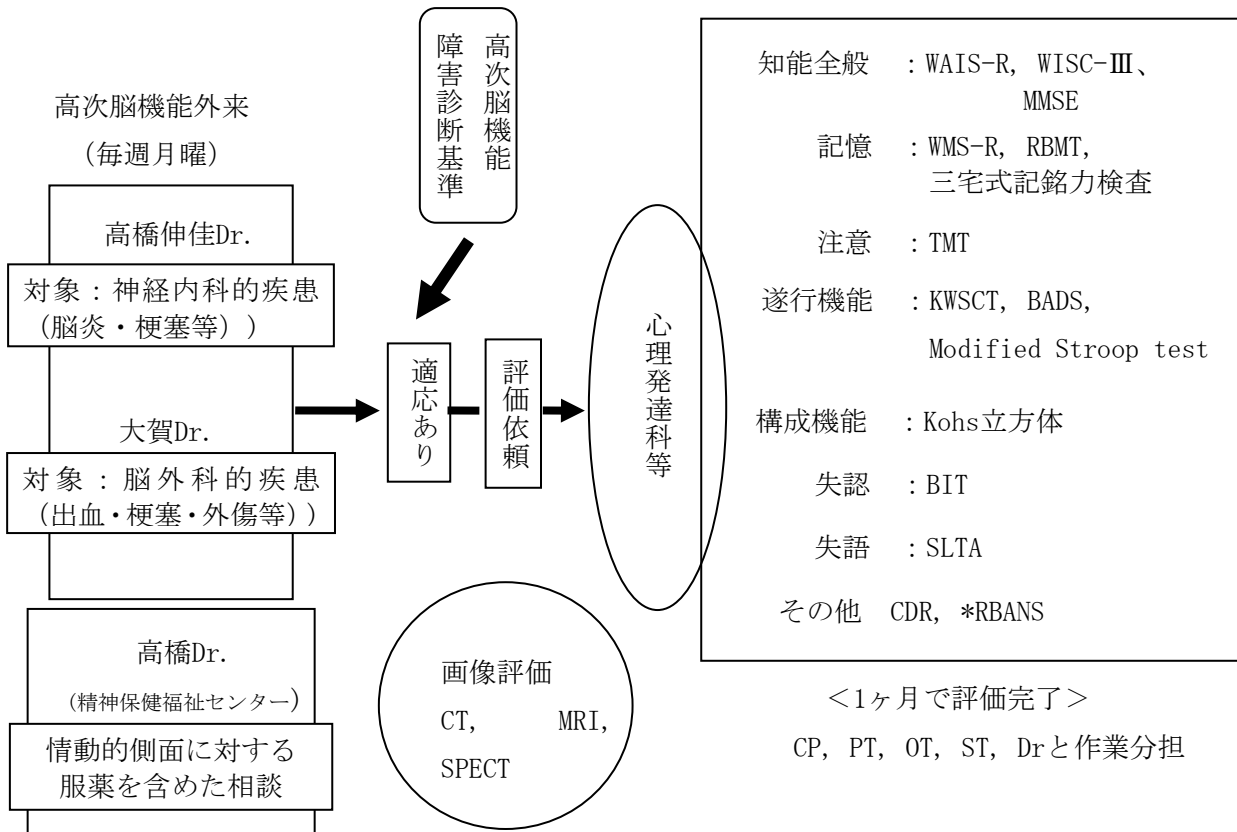
目的に沿った事業のイメージ図は、千葉県高次脳機能障害支援対策整備推進委員会委員長である、当センター脳神経外科部長の大賀医師が中心になって作成。9月9日センター内職員を対象に、大賀委員長から説明された。参加者としては、当センター関係職員のほか、協力機関としての千葉県障相センター、千葉県高次脳機能障害当事者と家族の会など、外部からも参加をいただいた。

< 高次脳機能外来システム 1 >

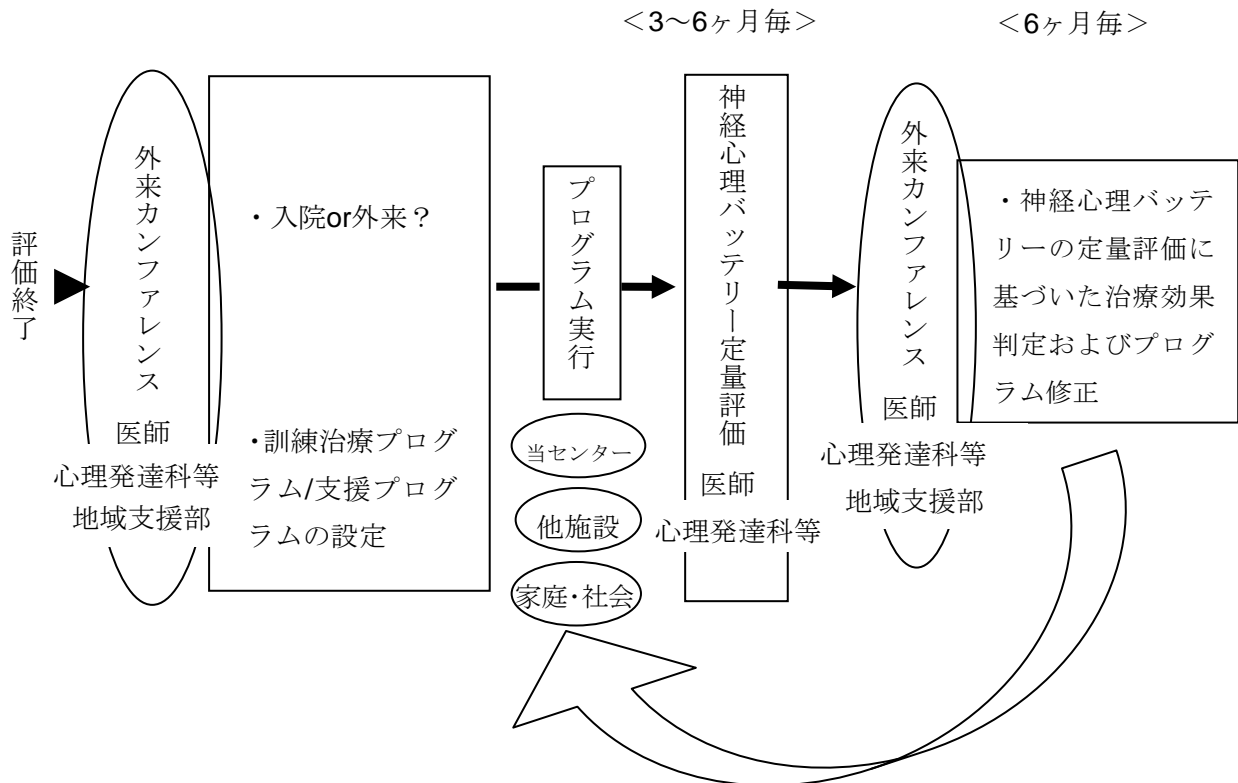
高次脳機能外来（毎週月曜）



< 高次脳機能外来システム 2 >



〈 高次脳機能外来システム 3 〉



構成メンバー：外来診察に当たる脳神経外科、神経内科医師が中心に毎月開催。その他精神科医師(千葉県精神保健福祉センター)もスーパーバイザーとして出席。その他のコメディカルスタッフとしては、担当理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、心理発達治療士、ソーシャルワーカー、生活支援員、支援コーディネーター等。

実施回数：10月から開始し、これまでに計8回、検討対象事例27名である。

(6) 更生施設高次脳支援プログラム検討

【目的】 当センター更生園利用者は、高次脳機能障害を伴う脳血管障害者が大半である。現在すべての利用者に対して個別支援は実施しているが、高次脳機能障害固有の問題を主症状に持つ方へのサポートシステムの作成までは困難である。とくに「就労するがすぐに止めてしまう」「辞めた後ドロップアウトしてしまう」方たちに、24時間の生活サポートが可能な更生園で、問題の洗い出し→無理のない支援プログラムの作成→実行→評価をしながら、本人の障害への気づきを伴う生活の組み立てをしていくことで、より確かな就労・復職を目指すサポートプログラムを関係機関と連携しながら作成することを目的とする。

【実施状況】 園内での打ち合わせ会実施回数計2回行い、基本的な目的の確認と事例検討会を行った。また、昨年度実施した香取海匝圏域実態調査以後、就労支援を目的に入園してきた利用者の、評価・支援プログラムの検討を、地域サポート機関の人たちと共同で検討会を2回行った。特に地域サポート機関の人たちに、更生施設入園中にどういう評価が、何を目的になされ、その結果どんな支援プログラムが作成され、実行過程でどんな問題が出てきたのかを知らせることは、退園後の地域生活への引き継ぎがスムーズになり、問題の把握も共有していけるという利点がある。

(7) 市町村訪問相談支援グループ

【目的】前年度実施した全市町村に対する調査のうち、要支援者に訪問相談支援を地域支援部および更生園、千葉県障害者相談センターと協働で行う。

【実施状況】1)平成15年度に実施した市町村の調査から相談希望としてあがった53ケースを基に訪問相談支援の方法を打ち合わせ。

相談希望のあった14市町村に、H16年7月に希望ケースの現状を再確認していただき支援を希望されるか確認。

希望のあった3市町村と高次脳機能の訪問支援の説明希望の1市、新規に訪問支援として取り上げた1市の計5市町村に対し支援を開始。

支援希望ケース数 9ケース

訪問支援ケース数 4ケース

訪問支援回数 10回

当センター外来評価および訓練となったケース 1ケース

訪問支援の家庭で、行政窓口担当者や関連支援機関の担当者との合同会議が開催できることで、当該障害への理解と具体的な支援方法に関する共通認識が持てるようになってきている。

この全県調査から始まった訪問相談支援を来年度以降も継続していく事について検討。

(8)高次脳機能障害者支援ネットワーク構築事業ー都市部編ー（三菱財団助成事業）

【目的】千葉県は、都市型生活形態と農山村生活形態とが混在している自治体である。慣習、住民意識等の実態は郡部と都市部という生活圏域では大きく異なっており、それぞれの生活圏域でのサポートの仕方やネットワークの組み方は大きく異なると考えられる。今回の都市部での調査活動によって、生活実態に沿った支援内容のシステム化やネットワーク構築をしていく手がかりとしたい。平成15年度の調査結果を併せて、千葉県全体のイメージ化を図り、より現実的な支援ネットワーク構築をしていくための一助とする。

また自閉症等他の障害支援システムとの連携を図るため、本調査において自閉症・発達障害、重症心身障害者の実態調査を同時に実施し、当該障害の特徴を浮き彫りにすることを目的とする。

【実施状況】

柏地区高次脳機能障害者支援ネットワーク構築プロジェクト委員会：開催回数 5回

調査対象：柏市福祉施設等調査対象機関 計265カ所

高齢者施設113施設、障害者施設32施設、児童関係施設58施設(含む幼稚園)、学校教育関係施設68施設。回収率約60%(学校関係は現在未調査)。

柏地区市民公開講座開催予定：日時 平成17年5月7日

テーマ：「地域で暮らすためのサポート」～高次脳機能障害者の場合～

プログラム：

講演 「高次脳機能障害とは？」～あなたの脳力・わたしの脳力～

大賀 優氏(千葉県高次脳機能障害支援対策整備推進委員会 委員長)

(千葉県千葉リハビリテーションセンター脳神経外科部長)

シンポジウム 「地域で暮らすためのサポート」～高次脳機能障害者の場合～

司会

小滝 みや子氏

(千葉リハビリテーションセンター地域支援部)

基調提案

佐藤 徳太郎氏

(国立身体障害者リハビリテーションセンター総長)

柏市高次脳機能障害者実態調査報告

太田 令子氏(プロジェクト委員長)

地域相談事業を通し高次脳機能障害者とかかわって

竹林 典弘氏(障相センター)

当事者が求めるサポート

綿貫氏

行政の立場から「誰もが地域で暮らすために」

竹林 悟史氏(県障害福祉課長)